
原作カードキャプターさくら

工藤 太一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原作カードキャプターさくら

【Nコード】

N6693Q

【作者名】

工藤 太一

【あらすじ】

私、木之本さくら。10歳。

ある日お父さんの書斎で不思議な生き物ケロちゃんとお会ったの。ケロちゃんは不思議な魔法使いクロウ・リードさんが創った個性的な魔法のカードクロウカードを守る封印の獣だったんだけど、私が封印を解いちゃったせいでケロちゃんは私にカード集めをしてくれと頼んじやったの。

私は、ケロちゃんに貰った魔法の杖でカードを封印することにしたの。

（前書き）

このお話は原作でさくらちゃんジャンプが跳を捕まえる前から始まったものです。

ウィンドセッター風と樹が捕まるところを下手ですが解説しておきます。

ピンポン。

玄関でチャイムが鳴って私・木之本さくら（10歳）は、慌てて玄関に向かいました。玄関には大の仲良しの大道寺知世ちゃんが立っていました。

「あれ、知世ちゃん。」

「さくらちゃんの家のお掃除の差し入れにまいりました。」

「おー、うまそうやな。」

綿足の横に黄色いぬいぐるみのような子がふわふわと浮いています。

「わー、ダメだよ。」

私は大慌てでその子をつまえました。すると知世ちゃんは気にいったかのように。

「まあ、可愛い。」

私は、部屋に戻ると知世ちゃんのお手製のマドレーヌを食べながらこれまでのことを話しました。

実は、今日は、私はお父さんの地下の書斎である不思議な本を手に取りました。開いてみると本が光りだして中から不思議な生き物が出てきました。それが黄色いぬいぐるみみたいな子です。名前はケルベロスといって、本の中にあった魔法のカード・クロウカードの封印の獣ですが、そのカードはなくなってしまいました。

クロウカード、封印が解かれるときに災いが起こるという言葉です。カードを作ったのはクロウリードという不思議な魔法使いです。そのカードはとても個性的でクロウさんはそれを封印するためにケルベロスさんを表紙にして本を作ったのです。カードは確かに封印はされたもののケルベロスさんが居眠りをしてしまったために私が

カードの封印をとりてしまい飛び散ってしまいました。

それで、封印を解いたわたしがケルベロスさんに貰った杖でカード探しをすることになりました。

「そんなことがあったんですか？」

「そうなんだ。それがこのケルベロスさんだけど、なんかケロちゃんって感じがするんだ。」

「カエルみたいなあだ名つけるな~~~~~！」

話を聞いた知世ちゃんは嬉しそうに、目をうるうるさせました。

「それでしたら私もご協力いたします。」

「よかったな。さくら仲間が出来て。」

「よくないよ！」

私は、ケロちゃんを怒鳴りつけました。知世ちゃんは鞆からきれいなドレスを取り出しました。

「それでは、初仕事にこの衣装を着てみましょう。」

私は、着替えてみるととても恥ずかしく思えました。何故なら、この衣装は不思議の国のアリスが着ているような衣装でした。おまけにケロちゃんは頭に黒いシルクハットを被っています。

「なかなか、ええ感じや無いか。」

「そ、そうかな~~~~。」

「とってもよく似合っていますわ。」

知世ちゃんはいつの間にかビデオカメラを私に向けていました。どうやら私の活躍を撮る気です。

「はう~~~~ん。」

その時、強い風が私の窓を叩いています。

「何、これ？」

「これは、ウィンディ風や。よし、カードキャプターの初仕事や。」

「ええ。」

「出動ですわ。」

私達は、外に出てみました。風を操っているのが羽を生やしたきれいな女の人でした。その人は、私を見るたびに微笑み、なぜか持ってきたクロウカードを収める本の中に入れていきました。

「あれ、本の中に入ってちゃったよ。」

「それは、そうや風はとてやさしいカードやさかいに自分からカードになったんや。」

「ほえカードに？」

私は、本を開けるとカードが一枚入っていました。それが風のカードでした。

「よかったですね。」

「そうや。せっかく見つけたカードに名前を書いて見たらどうやカードに名前を書くとカードは封印を解かれても持ち主の言うことしか聞けんから。」

「うん。」

わたしは、風のカードにSAKURAと書きました。

「書いたよ。」

「これからもよろしゅうな。カードキャプターさくら。」

「私は、まだやるって言っていないよ。」

その時、家の中がミシミシ、聞こえてきました。

「な、なんや。」

「ひよっしてこの中にクロウカードがあるんじゃないかな。」

「それは、判らんで。さくら、阿野鍵持ってるか？」

「このこと。」

私の首に羽の付いた鍵が下がっています。

「呪文はさっきわいが教えたやろ。その呪文を口にして鍵を杖に変えるんや。」

「判った。」

闇の力に示し鍵よ。真の姿を我の前に示せ。契約の元・さくらが命じる。封印解除！

その呪文で鍵はケロちゃんに貰った杖に変わりました。
私達は、家の中に入りました。

家の中は確かにミシミシいつています。

「なんだか、怖そうですわ。」

「さくら、カードは何処にあるか判るか？」

「うん、よく音がするのは……。」

私はよく音がするほうに目を向けました。

「地下のお父さんの書斎よ！」

私達3人は書斎の方に向かいました。

「本当にここですか？」

「うん、間違いないよ。」

私は、書斎のドアを開けました。なんと書斎に木がいつぱいあります。

「何これ？木がいつぱいじゃないの？」

その木の枝がうようよと動いています。まるでジャングルのようです。

「これは、樹^{ツツ}のカードや。これは、早いところ封印せんとアカンな。」

「でも、どうやって？」

「そうだ。風で木を退けよう。」

私は、風のカードを取り出しました。

「風よ。戒めの鎖となれ。風！」
ウインディ

カードに杖をつけると風が実体化して木を次々と退けました。急に木が少なくなり、木の精霊が微笑んでいました。

「さくら、今のうちや。」

「うん。汝のあるべき姿に戻れ！クロウカード！」
精霊はカードに戻りました。

「やったな。さくら。」

「お疲れ様でした。」

知世ちゃんはまだ、ビデオを私に向けている。

「知世ちゃん、恥しいよ。」

「何言うてんねん。1日で2枚も捕まえたやないか。」

「だって・・・。」

「カードは後17枚や。頑張つてな。」

「えー、そんなにあるの。」

「あるのや。」

「そんな　　！」

ビデオを向けた知世ちゃんは嬉しそうに。

「それでは、記念にポーズを。」

「ほーい。」

私とケロちゃんはポーズをとることになりました。

そんなこんなで私のクrouカード集めがはじまりました。

（後書き）

そんなこんなでさくらちゃんのカードキャプターとしての使命が始まりました。その続きは漫画でご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6693q/>

原作カードキャプターさくら

2011年10月6日20時28分発行